

ズル休みの勧め!?

7月には、アウトドアを楽しむための個人的で素敵な輸入車を所有している方々取材するために、湘南や外房のサーフポイント、オートキャンプ場、利根川上流にある湖など、夏の太陽をいっぱい浴びながら海や高原を駆け巡った。もちろんテープレコーダーとノートは片手に持っていたものの、オーナーたちと楽しい夏のひと時を過ごすことができた。

特に利根川の源泉のひとつにもなっている「ならまた湖」で乗ったファルトカヤックには、これまで経験したことのない爽快感を味わわせてもらった。ファルトカヤックとは、アルミパイプ製のフレームをナイロンやポリエステル製の防水布で覆った軽量で安定性の高いボートだ。全長は4mほど、主に湖などの流れが少ない場所で使用する。転覆する危険性が少ないため、初心者にも適しているらしい。しかも、フレームとパドルを分解して布を折り畳めば、担いで持てる程度の専用バッグに収まってしまう。セダンのトランクや電車でも持ち運び可能というのだからすごい。

クルマから降りて組み立て、水深が膝くらいのところまで担いで(重量は20kgにも満たない)着水させれば、後はひたすらパドルを漕ぐだけだ。動力源は自分の腕となるから直列2気筒。馬力にはかなりの個体差がある。

しばらくすると肩のあたりが張ってくるから、パ

ドルを置いて小休止。雪解け水を溜め込んだ湖は、イワナの魚影も確認できるほど透明度が高く、聞こえてくるのは小鳥のさえずりだけだ。時間が止まったような感覚というのはまさにこのこと。彼方には新緑に包まれた尾瀬の峯が見える。東京から僅か2時間半ほどクルマを走らせただけのところ、このような手付かずの自然が残っていることに驚いた。

「いってきます!」と自宅を出て、毎朝都市部へ向かうクルマの長い列に並ぶところを下り方向にステアリングを切ってフル加速。目指すは、冷蔵庫のような会議室ではなく、太陽がじりじり照りつける海か山。そう、大人の男には、ひと夏に一度くらいはそういう日があってもいい。戦っている人にこそ充電は必要なのだ。

そんな時、トランクにファルトカヤックとウェアがあればもっといい。どうせなら、宿をとって温泉に入りたい、いや、愛犬も連れ出したい、まてよ! ゴルフバッグも……、なんことを考え出すとキリがありませんけれどね。

ともあれ、途中のパーキングでネクタイを外して携帯電話のスイッチを切る前に、会社へ「風邪をこじらせたみたい」と連絡を入れておくことも忘れずに。このことを忘れて、家族も巻き込みちょっとした騒ぎになります。経験からして……。

野田義彦
YOSHIHIKO NODA

情報誌の編集部を経て、創刊準備号からUCGに加わり、第2特集のちょっと古いクルマを中心に担当。03年4月号からUCG編集長を務める。現在の愛車はランチア・テーマ8.32。1959年生まれ。

